


 書評

木村 敏 著

関係としての自己

内海 健

木村敏氏が和辻哲郎文化賞を受賞したという朗報に接したのは、つい2年前のことである。

本書は、その受賞作である『著作集』以来、はじめての本格的な論集である。2000年から2004年の間に発表された12編の論文に、導入部として明快な序論が附され、300頁余りの快著となった。全編すべて、「『自己』とは何か」という問いに貫かれた珠玉の論考である。それにしても、集大成を終えたばかりでのこの産出性には驚かされる。

精神病理学のマエストロたちに共通するのは、ある種の「明るさ」である。たとえば、安永浩には幾何学的な明晰さがあり、中井久夫は現代の呪術師を志向しながら、ギリシア的な晴朗さがある。では木村の場合は何だろうか。一言で言うなら、それは「祝祭性」である。彼の手にかけると、晦渋なフッサールも、陰鬱な西田幾多郎も、にわかに色づき、躍動し始めるのだ。

木村の思考は、典型的な掘り下げ型である。つねに最初から考え直され、飽くことなく反復される。強靱さと敏捷さ、そして能動的健忘症(ニーチェ)とでもいうべき健全さによって、停滞に陥ることなく、いまなおそれは展開され続けている。

ほの暗い闇をくぐり抜けて、彼の思考が目指すのは「生命」というものである。この領域は、近代以降、精神と物質、こころとものという二項対立の狭間で、ともすれば忘れ去られてきた。しかし著者の生命への志向は、初期から一貫しており、いわゆる内因性精神病全般において、豊穡な病理学として結実した。

本書でもっぱら論及される疾患は、統合失調

症である。まさに自己の自己性にかかわる病態である。この自己というものが裂開するポイントには、2つの側面がある。一つは「死」のモメントであり、その代表は言語や記号といった無機質的なものである。自己はこうした契機に脅かされつつ、それなしには存立し得ないという逆説を抱え込む。そして、今ひとつが、「生」そのものである。

木村は個と種、個体と集団を対置し、後者こそが一次的であると明言する。『あいだ』以来、一貫した思考である。個体とは、生命という奔流から見れば、そこから派生したもの、切断して切り出されたものにすぎないのである。そうなると、両者は単なる論理的対立項ではもはやない。というのも、ひるがえって個から見るなら、生命とはおのれの母胎であると同時に、逆説的にも「死」の契機として立ち現れてくるからである。そして木村は、ここに個別化をめぐる人間の悲劇としての、統合失調症の病理の淵源をみる。

こうして我々は木村の目もくらむような生命論へと引きずりこまれていく。私も全編一気に読み通した。ただ、自己を自明の前提としてはばからぬ心理学に頭を浸された精神科医が、どの程度彼の思考を理解できるのか、気にはなる。そう考えるにつけ、このマエストロをまどろませてはならない、といっそう思いをあらたにさせられた。そのためにも、我々は臨床の思惟をいっそう磨かねばなるまいと思う。

(帝京大学医学部精神神経科学教室)

● 四六判 310頁 2005 定価2,730円(本体2,600円+税) みすず書房